

思わぬところで

白馬村立白馬中学校3年 大島 沙優姫

コロナウイルスの蔓延がこんなにも長引いてしまうとは予想もしていなかった。コロナウイルスが発生した当初、私にとっては他人事であった。日に日にニュースで大きく扱われるようになってもまだ自分の周囲に感染者がいなかったからか、私にとっては遠い存在であった。私が事態の重大さに気が付いたのは緊急事態宣言が発令された昨年四月である。

私の住んでいる県は多くの観光客の来訪によって成り立っている、そういっても過言ではない観光立県である。それにも関わらず、「今年のゴールデンウィークの観光はお休みです。」となってしまったのだ。毎年ゴールデンウィークといえば、多くの観光客が訪れ自営業を営んでいる私の家も大変忙しい。私にとってこの時期は特に家の手伝いをすることが日課であった。それが、宿泊者なしとなってしまったわけである。私は手伝いをしなくて嬉しい、と楽観的な考えよりも、収入はどうなってしまうのだろうか？などといった様々な不安が頭の中を駆け巡った。

しかし、心配は無用であった。国や県、村から支援金をいただけたのだ。「通常営業した時には及びもしないが大変ありがたい。」と両親も言っていた。国民の多くに支援金が支給されたということは私の金銭感覚からは想像もできないほどの金額が恐らく支援金として給付されているのだろう。

私は税について学んでいたがあまり実感が湧いていなかった。思い返してみれば確かに学校に通学しており、そこで私が毎日使っている教科書にも税金が使用されていたのだ。生活に欠かせない道路や憩いの場である公園、また、病気になった時にも診療代には税が使われているのだ。税とはこれほど身近な存在で私たちの暮らしの役に立っていたにも関わらず、私は今までありがたさを感じてこなかった。なぜだろうか。それは、あまりにも日常の生活の中に溶け込んでいたからではないかと思う。しかも私は「税金は払わされている物」という負の感情しか持っていなかったのだ。私が生まれる前は消費税がなかった事実を聞いた時は、とても羨ましく思えた。しかし、今回実際に、私たちが普段納めている税金が支援金として給付され、生活が助けられた、この経験により私は改めて税金の意義を考え直すことができた。日々の生活だけでなく、万が一の時にも税金は役に立つのである。

今回のこのコロナウイルス蔓延のように、社会では何が起きるか予想することが不可能である。今回のように、思いがけないところで困り、そして税金に助けられる、このような状況が今後も訪れるかもしれない。その場、その瞬間で自分が納めた税金が役に立っているのだということを実感することが出来ないとしても、私は社会人になったら進んで税金を納めようと思う。小さな何気ない行為の一つが、自分自身、または誰かの生活を救うと思うから。